

愛
又
し
あ
う

FAIRE L'AMOUR

ジャン=フィリップ・トゥーサン

Jean-Philippe Toussaint

野崎 歓・訳

愛しあう

冬

1724

...

...

...

...

塩酸を詰めた小瓶を、いつかだれかの顔に投げつけてやろうと考えて、肌身離さず持ち歩くようになった。以前はオキシフルが入っていた色つきガラスの小瓶だが、いざとなったらその栓をあけて相手の目に狙いをつけ、そして逃げ出せばいい。琥珀色の腐食性溶液の入ったこの小瓶を手にしてからというもの、気持ちが不思議に落ち着き、毎日に刺激が加わり、思考がとぎすまされた。しかしマリーは心配していた。もつともな心配だったのかもしれないが、結局その塩酸はぼくの目、ぼく自身のまなざしに向けて浴びせられることになるのではないかというのだ。あるいは彼女の顔、もう何週間ものあいだずっと泣き濡れたままの彼女の顔に向けてか。いや、そんなこと

はないさ、とぼくは優しげな微笑みを浮かべて打ち消した。そんなことはないと思うよ、マリー、そう言って彼女を見つめながら、ぼくは上着のポケットに入った小瓶のふくらみを片手でそつと撫でるのだった。

初めてのキスをする前からもう、マリーは泣き始めていた。それはいまから七年ちよつと前、タクシーの中でのことで、車内の薄暗がりの中で隣に座った彼女の頬は涙に濡れ、その上をセーヌの川岸の影や、通り過ぎる車の黄色や白のヘッドライトの光がよぎっていった。そのときはまだキスもしていなければ、彼女の手を握ってもおらず、恋心などひとことたりとも打ち明けてはいなかった——そもそもぼくは彼女にそんな告白をしたことなどあっただろうか。ただ彼女を見つめ、隣でそんな風に涙を流す彼女の姿に感動し、呆然となっていただけなのだ。

同じ情景が数週間前に東京で繰り返されたのだけれど、しかしこのときぼくらはも

うきっぱり別れようとしていたのだった。互いに何も言わず、タクシーはその日の朝に投宿した新宿の大きなホテルに向かっていき、マリーは隣でさめざめと泣き、ぼくの肩によりかかってそつと鼻をすすったりしゃくりあげたり、手の甲でやみくもに涙をぬぐい、大粒の悲しみの涙は彼女を醜く見せ、マスカラを台なしにしてしまっていたが、それに対して七年前、ぼくらが初めて出会ったあときには、泡のようにふわふわと軽い、純粋な喜びの涙が彼女の両の頬を無重力状態でつたっていたのだった。タクシーは暖房が効きすぎていて、マリーは暑さで気分が悪くなってしまい、黒い革のロングコートを脱ごうとして後部座席のぼくの隣で苦勞して身をよじり、そのしかめ面にぼくに対する怒りをこめているかのようで、しかしタクシーの中がこんなに暑いのは、くそ、もちろんそれはぼくのせいではなく、彼女は運転手に文句を言いたさえすればいいのであって、運転手の名前と顔写真はダッシュボードの上によく見えるように掲示されていた。彼女はぼくを押しつけて二人のあいだにコートを置き、セーターを脱いで丸め脇に置いた。下に着ている白いシャツは体からずれてしわが寄り、

黒のブラジャーがのぞいて見え、パンツのベルトからシャツが少しはみ出していた。タクシーの中でぼくらは何も言わず、薄暗がりの中、ラジオからは日本語の意味はわからないものの陽気な歌がやむことなく流れ出していた。

タクシーはぼくらをホテルの入口前で降ろしてくれた。七年前のパリでは、ぼくはマリーに、バスチーユ近くのどこかまだ開いている店で一杯やりにいきませんかと提案した。ラップ通りがロケット通りが、それともアムロ通りがパッドラミュール通りが、もう忘れてしまったが。二人で夜の街を延々と歩き、カフェからカフェへ、通りから通りへとさまよって最後にはセーヌに浮かぶサンルイ島までたどりついた。その晩すぐにキスしたわけではない。そう、すぐにはなかった。だが、最初のキスに先立つ甘美なひとときを引き延ばしたいと思わない人間がいったいいるだろうか

——お互いに好意を感じている二人は、心の中ではキスをしようともう決めていて、意味深長なまなざしを交わし、微笑みを浮かべ、唇と手は予感に満ちているのだけ

ども、しかしお互いの口が初めて優しく触れあうその瞬間を、なおも先延ばしにしようとするのだ。

東京では、ぼくらはただちに部屋に向かい、口をつぐんだまま人けのない広いホールを横切っていくと、天井からぶら下がっているクリスタルのシャンデリア三つ、まばゆい輝きを放つシャンデリアのトリオが、ぼくらがホテルに戻ってきたまさにその瞬間から目の前でしずしずと揺れ始め、こちらがロビーを渡っていくのと一緒にカテドラルに吊るされた鐘のようにゆっくりと震え出し、クリスタルガラスがカチカチと音を立てて、床を揺らし壁を震わせて悲嘆にくれる物質界のうなり声に唱和したのだが、波が通り過ぎると、天井の照明が明滅して一瞬ホテルが真っ暗になった。ロビーのシャンデリアはなおも揺れながら徐々にまた点灯し、クリスタルガラスの無数の薄片は揺れ戻しのさんざめきを立てながらも次第に動かなくなっていった。レセプションにもエレベーターにも人の姿はなく、ぼくらは透明なキャビンの中で隣りあったま

ま口もきかず、エレベーターはアトリウムの中央をゆっくりと昇っていき、涙に濡れたマリ―は黒い革のコートとセーターを片方の腕に抱え、静止状態への移行に延々と時間をかけているシャンデリアのほうをじっと見つめていたが、マグニチュードから言えばあまりに微弱な地震だったから、ひよっとしたらそれはぼくらの心の中だけで起こったものだったのではないかと思えたくらいだった。上の階の廊下は静まり返り、ベージュのカーペットがはてしなくのびていて、ドアの前に置きっ放しのルームサービスのトレイには残り物が散らばり、汚れた皿の上にナプキンが斜めにかぶせてあった。ぼくの前を歩くマリ―は肩を落とす、腕にも力がなく、片手で廊下の壁に触れながら歩いている。ドアの前で彼女に追いつき、カード式のキーをさしこんで部屋の中に入った。そしていずれの晩も、つまりパリでも東京でも、ぼくらは愛しあった――最初のときは初めての、そして今回は最後のセックス。

う？ はっきりとはわからないが、何度もしたことは確かだ。何度も……。ぼくはドアを閉めて、疲れ切ったマリイが、黒い革のコートとセーターを片方の腕に抱え、パ
ンツから白いシャツをはみ出させた姿でよろよろと寝室の中に入っていくのを眺めて
いた——そんな細かい点にぼくは心を動かされていたのだが、しかしやがて彼女はシ
ャツを脱ぎ、するとあとに残るのはぼくの両手のあいだに強くはさんだ彼女の顔だけ、
丸めた手のひらのあいだのその熱いこめかみだけで、眠くてしかたがない様子のマリ
イは涸れることのない涙をスローモーションで流し、そしてぼくはそれでも今夜、結
局のところセックスをして、胸を引き裂かれるような思いを味わうことになるのだろ
うと考えた。二人のどちらもまだ、天井であれ枕元であれ部屋の電気をつけようとし
てはおらず、大きなガラス窓越しには遠くに新宿副都心が夜の闇に輝いて見え、間近
には、近さゆえに遠近感が失われたせいかわりにほとんど目にも入らないような感じで、
丹下健三設計による都庁の巨大な建物の左翼がそびえていた。下を見下ろすと、窓か
ら数メートル下にテラス式に張り出した屋上が暗く見えていて、そこには背の高いネ

オンのライトが垂直に立ち、航路標識のように夜の闇の中で落ち着き払ってまたたい
ていて、その赤や黒や薄紫の反射光が点滅し、拡大されて部屋の中まで入ってきて、
壁にぼおっととりとめのない赤い光の輪を描き出し、マリイの顔の上に赤外線ランプ
で照らされたような、透明で抽象的な澄んだ涙をきらめかせた。窓ガラスに沿って進
むマリイの目が濡れていることは暗がりにもわかり、前をはだけた純白のシャツ
は、間隔を置いて規則的にその言うに言われぬ血のような色の光の照射を受けて染め
上げられるかのようで、ネオンはぼくらの前でそんな風に間歇的に光を放ちながら下
界に向かってまたたいているのだった。ぼくは彼女のたたずむ窓辺までいき、目の前
の闇の中に林立するタワーやオフィスビルをしばらく一緒に眺めた。いずれ劣らずお
ごそかに立つそれらの建物はどれもがその幾重にも階を重ねた高みから、沈黙と夜の
とばりに包まれた自分の受け持ち部分を個々に見張っているかのようで、ぼくはそれ
らの一つ一つにゆっくりと視線を注いでいった——新宿住友ビルディング、新宿三井
ビルディング、新宿センタービルディング、京王プラザホテル。どうしてわたしにキ

スしようとしなの？ とそのときマリーが小声でぼくに尋ねた。彼方をじっと見据えたその顔には、何かかたくなな表情が浮かんでいた。ぼくは返事をせず外を眺め続けた。しばらくしてぼくは抑揚のない、驚くほど穏やかな声で、キスしたくないなんて言った覚えはないよと答えた。それならどうしてキスしてくれないの？ そう言いながら彼女は近づいてきてぼくの肩を抱いた。ぼくは身を硬くし、できるだけ優しく彼女の手を押しわけ、ふたたび夜の街をじっと眺め始めた。やはり穏やかな、ほとんど表情のない声で、単に事実を述べるだけという風に答えた。キスしたいなんて言った覚えもないね（遅すぎるよ、マリー、もう遅すぎる）。彼女は窓の前に立ってしげしげとぼくを見た。もう眠ろうよ、マリー、とぼくは言った。眠ろうよ、もう遅いんだから。そのとき疲れのせいか苛立ちのせいか、彼女の肩におるつと震えが走るのが見えた。もうひとこと何か口にしたいと思ったが、何も言わずにこらえ、彼女の腕にそっと片手をのせ、すると彼女は乱暴に腕を振り払った。もう愛していないのね、と彼女が言った。

七年前、彼女はぼくに、だれが相手であれこれまでにこんな気持ちになったことはない、これほどの感動、甘美で胸の熱くなるようなメランコリーを覚えたことはない、と打ち明けてくれたのだが、彼女がそんな気持ちに襲われたのは二人で食事中、ぼくが手に持ったワイングラスを彼女のほうにそろそろと、慎重に近づけたごく単純で、一見まったく取るに足りない動作を目にしたときのこと、しかしそれはまだ会うのはやっと二度目、ろくに知りあってもいない男女のあいだでは何とも唐突なふるまいでもあった。ともかくぼくは自分のワイングラスを彼女のグラスのふくらみめがけて近づけ、そっと傾けて触れあわせ、一瞬のうちに乾杯のまねごとをやったのけたのだが、彼女に言わせるとこれほど大胆かつ繊細で明快なやり方ってちよつとほかにはない、そこには知性と優しさとスタイルが凝縮されているということになるのだ。そのときにつこりと微笑んだ彼女は、あとになってぼくに、あのときにもうあなたが好きになっちゃったと告白した。とすれば、ぼくを前にしたとき彼女があれほど強烈に感

じるらしい、人生の美しさや世界との調和といった感覚を、ぼくは言葉によって伝えたのでもなければ、まなざしや行動で示したのでもなく、もっぱら彼女のほうにゆつくりと向かう片手のあの単純で優雅なしぐさによって伝えたわけで、その繊細さがひとつの隠喩^{メタファー}としての意味すら持ったため彼女はにわかには自分と世界とがぴたりと調和したように感じたのだらう。だからこそ数時間後に彼女は負けじと同じような大胆さ、ナイーブで怖いもの知らずの率直さを発揮して、ぼくにこう言ったのだった——
愛しいあなた、人生って美しい。

マリーはシャツを脱ぎ、ホテルの部屋の窓の前に立ったままそれを足元に落とすと、肩をむき出しにして、上半身はぼくが愛してやまないあの腕そうな黒のレースのブラジャーだけの姿でベッドのそばの明かりをつけにいった。そのときになってようやく、ぼくらが部屋をどんなに散らかり放題にして夕食に出かけていったのか、そのすさまじさが明らかになったのであり、カーペットの上には十個ほどのスーツケースが開い

たまま、枕もとのランプシェードから洩れる弱い光に照らされて転がっていた。それはマリーが前々日ロワシー空港でチェックインした重さ一四〇キロ近くの荷物で、八〇キロの超過分を請求されても彼女は顔色一つ変えず、航空会社のカウンターで耳を揃えて即金で払ったものだが、それが部屋中に散らばっていて、パッド入りの金属製スーツケース八個と、同種のさらに大型のスーツケース四個には彼女の最新コレクションのドレスが収められ、それに加えてなかば柳細工、なかば鋼鉄製のほっそりとしたケースが一そろい、これは芸術作品の運送のために特別にあつらえられたもので、チタンやケブラーで作った前衛的衣裳が入っていた。それは品川の「コンテンポラリー・アート・スペース」で開催される現代芸術展のために彼女が制作した作品で、次の週末に彼女はそのオープニングに出席することになっていた。マリーはデザイナーであると同時に造形作家でもあって、「アロンジ・アロンゾ」という自分のブランドを数年前から東京で展開している。ぼくは彼女のほうをじっと見ていた。彼女はドレスが散らばったベッドの上にはたりと倒れこみ、そのあおりを受けてドレスはしわく

ちやになり次々にずるずるとだらしなく床に落ちていき、そして彼女は泣いていた、愛しい人よ、ドレスに顔をうずめ裾飾りに髪を絡ませて。数ヶ月前に父親を亡くし、いまや彼女の胸の内では涙が幾重にも混ざりあい、この何週間かというもの、波乱に満ちたぼくらの日々は悲嘆の涙と恋の涙、喪の涙と驚きの涙で浸されていた。彼女のまわりではありとあらゆるドレスが展示中という様相を呈していて、透明カバーがかかったまましゃちこばって身じろぎもせず、飾り立てられ、お高くとまったドレスや、胸元が広く開いて誘惑的な、赤紫や血のような紅の色とりどりのドレスが、クローゼットの扉や間に合わせのハンガーに吊るしてあったり、にわか仕立ての芝居の楽屋よろしく彼女が部屋の真ん中に広げたトランクの蓋にひしめきあっていたり、椅子の上や肘掛け椅子の腕のところにしわができないように広げてあったりした。ぼくは部屋の薄暗がりの中で、炎のような輝きを、あるいは深い闇を放つそれらの抜け殻のようなドレスが、彼女のなかば裸になった体のまわりを取り囲んでいる光景を眺めていたが、こちらにもまた疲れを覚え——いまや時差が効いてきてひどい疲れに襲われ——、

またもや塩酸の瓶のことを考え始めた。それはぼくの携帯用カバンの中に入っていた。

旅の荷物を作ったとき、塩酸の小瓶をどうやって日本まで持っていこうかと思案した。旅のあいだ肌身離さず身につけていることはもちろん問題外だった。搭乗ないしは通関の際に見つかってしまったらどうし、いったいこの瓶はどうしたんだ、どこから持ってきたのか、何が入っているのか、何に使うつもりなのかと聞かれても答えることはできなかつただろう。とはいえ、トランクに入れて運ぶのもいやだった。中で割れて衣服が台なしになる危険があったからだ。結局、特に用心もせず——ただのオキシフルの瓶でしかないというその外見こそは、何よりのカムフラージュだろう——、携帯用カバンの側面についている三つのポケットの一つに入れておいた。革でできた仕切りを動かすことができるようになっていてそのポケットには、ほかに香水のフラスコとカミソリの刃の束がそれぞれ納まっていた。この携帯用カバンにはこれまでに歯磨き粉のチューブと爪切りだの、ハチミツとジャムだの、クラフト紙の封

筒に入れた現金だのといった雑多な品々が詰めこまれていた。まだ現像に出していないいろいろなメーカーのフィルム、イルフォードEP4の黒と青の小さくてコンパクトなパトローネやイルフォードFPSの黒と緑のパトローネなどは、訪れた国によっては秘密裏に持ち出さなければならぬこともあった。だが塩酸の小瓶の場合はだれの注意も引かずにパリ・東京間を旅したのだった。

一緒に日本に行こうとマリーが言い出したその日、彼女は二人のあいだに残った恋の最後の蓄えを旅のあいだに使い果たしてしまうつもりなんだということがぼくにはすぐにわかった。もし別れたいというのであれば、前から予定されていたこの旅行をいい機会として互いに少し距離を置くことにしたほうがもっと簡単だったのではないか？ 縁を切るために一緒に旅行するなどというのは最善の方法だっただろうか？ ある意味ではそうだった。なぜならぼくらは近くにいれば傷つけあい、離れ離れになると仲直りしてしまうような二人だったからだ。お互いの感情はあまりに不安定で、

もはやにっちもさっちもいなくなってしまうので、二人が仲直りする可能性があるとしたらそれは二人のうちのどちらかがいなくなることだけだっただろうし、逆に相手がそばにいるとしたらそれは深まりつつある溝をいつそう深め、二人の別れは避けられないものとなるに違いない。一緒に東京に行こうと言い出したとき、彼女はそうしたことを意識していたのか、別れるためにわざわざぼくを誘ったのだろうか。わからないが、そうではなかっただろうと思う。そしてまたぼくは、日本への旅を提案したとき彼女の頭には、少なくとも二つばかり、いささかよこしまな考えが宿っていたのではないかと疑っているのだが、まず第一に、ぼくにはその提案を受け入れることはできないだろう（理由はいくつもあるが、とりわけ一つの理由によって。とはいえそれが何かをここで言うつもりはないが）と彼女にはわかっていたはずなのであり、そして第二には何と言っても、旅行中二人のあいだにどのような立場の違いが生じるかを彼女は十分に意識していたはずで、つまり自分はちやほやさされ、人との約束や仕事に忙殺され、協力者や招待者やアシスタントたちに取り巻かれているのに対し、